

英知の太陽

オーム シュリ サイ ラム。

私たちが最も敬愛するバガヴァンの蓮華の御足に謹んでお祈りを捧げます。

親愛なるサイの帰依者の皆様、現存するアヴァターの新しい局面において、バガヴァンが毎日午後に行われる御講話を通して私たちを祝福されてから、二ヶ月余りが過ぎました。私たちはここに集まり、座り、ダルシャンを受け、御講話を聴いて帰ります。しかし、聴いたことについて深く考えているのでしょうか？ もしそうしたならば、この上ない難解なヴェーダーンタの概念に非常に簡単な方法で触れていることに気がつくでしょう。私の言うことが信じられないなら、どうぞヴェーダーンタの本を手にとってみてください。きっと二ページ目を読みきることはないでしょう。私は何度も試みましたが、そのような結果に終わっています。私に理解力が欠けているのではなく、ヴェーダーンタが難しすぎるのだと思います。なぜバガヴァンは、そのような複雑なことを簡単な方法で説明することができるのでしょうか？

これに対する答えがあります。100年以上前、聖者ラーマクリシュナ パラマハンサは言いました。

「イーシュワラ（シヴァ神）の化身に不可能はない。彼はジーヴァートマ（個我の魂）とパラマートマ（至高の神我）のあらゆる難解な問題を容易に解かれる。彼の御教えはとても簡潔で、子どもでさえ理解することができる。彼は、長い年月の間にできてしまった無知の暗雲を払う**英知の太陽**である」

聖者パラマハンサは、数十年のちに誕生する神の化身に備え、期待し、このように述べたのです。

さて、ここで私の話の要点を補うため、具体的な例を挙げてみたいと思います。私たちは皆、「アドワイタ」（不二一元論）という言葉を目にしたことがあります。それを誰かに説明しようとしても、さじを投げてしまうことでしょう。それは簡単なことではありません。にもかかわらず、バガヴァンは非常に多くの異なった方法でそれを説明なさいます。昨日、私たちはその一例を聞きました。スワミは、バーヴァ アドワイタム（思いによる一体性）、クリヤ アドワイタム（行動に表れる一体性）、パダールタ アドワイタム（あらゆる物体の一体性）、についてお話しになりました。これらすべての例において、一つ、あ

るいは残りの手段を通して、一体性の感覚を得る可能性はどれほどのものでしょうか？ 昨日、バガヴァンはゴーピカー（牛飼いの牧女）たちの例を挙げて、バーヴァ アドワイタム（思いによる一体性）を説明してくださいました。

皆さんが記憶されているかどうかわかりませんが、数ヶ月前、夏期講習の期間中、スワミはこれをバラタ（ラーマ神の弟）の例をとって説明なさいました。14年もの間、バラタは神の帰りを待ちながらナンディグラムにいました。ラーマ神は森の中、ランカーなど、あらゆる場所に存在していました。そして神は、バラタの心の中にも存在していたのです。バラタは肉体的には務めを解かれていますでしたが、いつもラーマのことを思っていました。それは14年の間にバラタの外見がラーマ神とそっくりになるほどでした。バガヴァンは次のように仰いました。

「ラーマ神はついにナンディグラムを訪れ、バラタと再会しました。そのとき二人は馬車に乗っていましたが、大衆はどちらがバラタで、どちらがラーマであるかわからなかったのです。人々の多くはバラタをラーマであると思い、花冠を持ってきてバラタに贈りました。というのは、二人はとてもよく似ていたからです」

「ブラフマンを瞑想すれば、ブラフマンそのものになる」ヴェーダはこのように述べています。それが実際にこの件の中で起きたのです。2、3年前のクリスマスに、バガヴァンがここ、プールナチャンドラ大講堂で別の例を挙げられたのを私ははっきりと覚えています。

「イエスはあまりにも深くモーゼ（神から十戒を授けられたヘブライの指導者）を瞑想したため、イエスの容貌はモーゼそっくりになりました」
ラーマクリシュナ・パラマハンサがハヌマーンを瞑想すると、まるで猿のような尻尾が生え始めたという話も聞いたことがあるでしょう。

これらの素晴らしい事例に加え、聖者トゥッカーラムの生涯からの逸話をお話しして、補足説明させていただきたいと思います。これはとても力強い逸話で、皆さんの多くはまだお聞きになったことがないと思います。この話には二つの要素があります。一つはある意味でやや滑稽です。ご存知の通りトゥッカーラムは敬虔なヴィットラ神（パンダルプールで祭られているパーンドウランガ・ヴィットラ）、つまり他ならぬクリシュナ神の帰依者でした。トゥッカーラムは、絶えずヴィットラ神の瞑想と崇拝に没頭していました。

ある日、トゥッカーラームの住む村に、たいへん物知りのアドワイタ（不二一元論）に精通したヴェーダーンタ学者がやって来ました。その学者はトゥッカーラームに言いました。

「いいかね、ヴィッタラ神を崇拝することはとても良いことだ。しかし、それはまだドワイタ（二元論）の境地である。当然、それは最初の段階であり、人はそれを超えてアドワイタ（不二一元論）に到達しなければならない」

トゥッカーラームは言いました。

「スワミジ、私は取るに足りない人間で、そのようなことは理解できません。私はクリシュナと共にいれば幸せなのです。どうかそっとしておいてください」

ヴェーダ学者はこれを聞き入れませんでした。駆け引き上手なその学者は、自分の主張を曲げず、ついに成功しました。つまり取り決めをしたのです。その取り決めとは、翌朝、トゥッカーラームが川へ行き、沐浴をし、祈りを捧げ、それからアドワイタ（不二一元論）の講義を聞くというものでした。翌朝、二人は取り決め通りに川へやって来ました。トゥッカーラームは沐浴し、祈りを捧げ、川岸に腰をかけました。そして学者が、

「では、始めます」と言うと、トゥッカーラームは頷いて、

「一つ、お願いがあります」と言いました。学者が、

「どのような願いだね？」と尋ねると、トゥッカーラームは言いました。

「体を覆いたいのです」学者は寒いからだろうと思い、こう言いました。

「よろしい、そうしなさい」トゥッカーラームは顔や頭まですっかり体をショールで覆ってしまいました。学者はアドワイタについての講話を始めました。その学者は、

「ふむ」、「そうか」、「素晴らしい！」など、何らかの応答を期待していたのですが、反応は何一つ返ってきませんでした。学者はきっとトゥッカーラームが深く考え込んでいるのだろうと思い、さらに話を続けました。話に夢中になって一時間が過ぎ、二時間が過ぎ、三時間が過ぎました。ようやくその学者は言いました。

「私の話は終わった。さて、アドワイタについてどのように思うかね？」

何の返事も返ってきません。学者は当惑してしまいました。やがて腹を立て、いきなりトゥッカーラームのショールを剥ぎ取りました。学者はそこに見たのです！ トゥッカーラームが両耳を塞いだまま、「クリシュナ、クリシュナ、クリシュナ、クリシュナ」と唱えているのを。学者は激怒して言いました。

「どういうことだ！ おまえは私に恥をかかせたのだぞ！」

するとトゥッカーラームは答えました。

「私は、あなた様にアドワイタ（不二一元論）を望んではいないと申し上げました。私はクリシュナと共にあればとても幸せでいられるのです。どうして私をクリシュナと共にいさせてくださらないのですか？」

いささか滑稽であると申し上げたように、今、私たちは皆、この話を笑いました。

しかし、今度はバーヴァ・アドワイタ（思いと感情の一体性）に関する真実の部分へ話は移ります。トゥッカーラームが住んでいた村の人々は、毎年パングルプールへ巡礼に出かけるのが慣わしであり、トゥッカーラームもその巡礼に参加していました。しかし、年を取って参加できなくなりました。そのためトゥッカーラームは巡礼の一団に加わり、村はずれまでついて行って、こう言いました。

「皆さん、どうぞいつてらっしゃい。私は年を取って体が弱り、一緒に行くことができません。しかし、皆さんが戻って来るまでここで待っていますよ」そこで、巡礼者たちはトゥッカーラームを残して旅立ちました。トゥッカーラームはそこに留まり、ずっとヴィッタラ神に祈りを捧げていました。

十日後、巡礼者たちは村はずれに戻ってきました。そして、その場所を見ました。巡礼者らはトゥッカーラームが座っているはずの場所に近づきましたが、トゥッカーラームの姿はどこにも見えません。

「どうしたのだろう、彼は家に戻ったのだろうか？」

「病気になったのではないだろうか？」

「具合が悪いのだろうか？」などと口々に言いました。もう一度そこを見たとき、巡礼者たちは輝く大きな光を見つけました。彼らはトゥッカーラームがブラフマン（神）を思い、ブラフマン（神）になったことを悟りました。しかし、トゥッカーラームは自分がブラフマン（神）であると気づいていなかったのです。これがバーヴァ アドワイタム（思いと感情の一体性）に関する別例です。バガヴァンの御講話を注意深く聴いていれば、聖者たちの伝説から豊富な体験を得ることができるのです。

バガヴァンは御講話を通してだけでなく、他ならぬバガヴァンご自身の生涯そのものを通して、私たちを啓発されるということを申し上げておきたいと思えます。

「私の人生が私のメッセージです」とスワミはおっしゃいます。その御言葉を聞くと、常に「私の」とは、サティヤ サイのことであると考えます。しかし、「私の」とは、バガヴァン シュリ サティヤ サイだけを指しているのではなく、同様にラーマ神やクリシュナ神、そしてシルディ サイ神を指しているという事を覚えておかなければなりません。彼らの生き方や時代は異なるかもしれませんが、しかし、根底に流れるもの、神の愛は同じです。それは少しも変化しておらず、異なる文化、異なる人々、異なる時代の後の世にも、同じメッセージであり続けるのです。神の御前にいるという祝福を受けた私たちは、真剣に自らの責任を受け止めなければなりません。私たちは、注意深くバガヴァンの御言葉を一つ残らず傾聴し、それを日常生活に結びつけなければなりません。日々、より良く成長しなければなりません。それこそがバガヴァンが肉体をとって化身された目的であり、そのためにバガヴァンは御講話をしてくださっているのです。私を含めて、皆にその責任があります。

神ご自身に、なお一層力強いメッセージで私たちを祝福していただくため、そろそろ私の話を終える時間かと思えます。その前に、蓮華の御足に今一度、謹んでお祈りを捧げて、皆様に私の思いを伝える機会を与えて頂いたその祝福に、感謝を表したいと思えます。

ジェイ サイ ラム